

スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋など楽しみの多い季節がやってきました。昼夜の気温差がある季節でもあるので、衣服の調節などをして、体調管理に気をつけていきましょう。現在、「マイコプラズマ肺炎」「RSウイルス感染症」「急性胃腸炎」の流行がみられています。

かぜのほとんどは、ウイルスが原因です。ウイルスにも多くの種類があり、感染したウイルスの種類によって炎症を起こす場所や症状が異なります。今回は、子どもの咳の原因と主な症状についてお知らせします。

咳の原因と主な症状



子どもに咳が出始めたら…

咳は発熱とならんで、子どもの病気の代表的な症状です。もともと咳というのは、口から肺につながる軌道のどこかに、外部から侵入したかぜのウイルスやほこりなどの異物があるとき、その異物を排除しようとして反射的に起こる自然な防御反応です。しかし、咳の背後には原因となるさまざまな病気が潜んでいます。子どもの咳は、体の中に何らかの異常があることを伝えるサインですから、咳が出始めたら、注意深く見守って、早めにかかりつけ医の受診をおすすめします。



1. かぜ症候群

かぜ症候群は、鼻やのどに急性の炎症をおこす感染症で、最も身近な病気です。発熱、頭痛、嘔吐、だるさなどの全身症状がみられることもあります。ウイルスの種類は数えきれません。症状がよく似ていても毎回違うかぜにかかっていることもあります。安静にして、栄養もとりましょう。

2. 急性気管支炎

ウイルス感染が原因で起こりますが、最初は、乾いたような咳がでて、胸が痛くなることがあります。しだいに咳がひどくなり、吐いたり、ゼーゼーと息が速くなる場合もあります。数日後には、咳が黄色いたんをともない、ゴホゴホと湿った咳にも変わります。5～10日たつと徐々に咳は少なくなります。熱は、でる場合とでない場合があります。症状が重くなると、咳が強くなり、眠っていても咳き込んで目が覚めたり、吐いたりすることもあります。気管支炎と似た症状がくり返し起こるようなら、喘息、喘息様気管支炎などと診断されることもあります。

3. RSウイルス感染症

1歳までに70%、2歳までにほとんどが感染するウイルスと言われています。流行は冬に多く、発熱、咳、鼻水などかぜをひいた程度の症状ですむ場合もありますが、一部の乳幼児には呼吸困難や無呼吸発作の状態がみられる場合があります。

新聞トピックスより！！

例年RSウイルスは、秋から年末にかけて流行のピークを迎えるが、今年は夏から急増し、昨年より流行が1カ月ほど早くなり、注意をよびかけている。国立感染症研究所は、全国の定点医療機関から報告をうけた患者数が、2003年以来最多であると発表した。

朝日新聞デジタル 2017年9月12日掲載



3. ヒトメタニューモウイルス感染症

RSウイルスに近いウイルスです。子どもから成人まで広く感染することが知られています。流行は冬から初夏にかけてみられます。発熱、咳、鼻水などかぜをひいたときのような上気道の炎症が主ですが、重症になると細気管支炎を合併します。

5. 百日咳

その名の通り、特徴的な咳や長引く咳がある病気です。最初は軽い咳と鼻水程度ですが、1週間ほどたつと、連続して咳込むようになり、顔は紅潮して、出血斑や目の充血もみられます。1ヶ月ほどして回復期に入り、咳もおさまってきます。治療には抗菌薬を投与します。百日咳はワクチンの接種率が向上したことで患者数も少なくなってきましたが、地域的には小流行を起こしています。乳児に多い病気とされていましたが、最近では学童期以降や成人にもあることがわかってきました。

6. 喉頭気管支炎（クループ症候群）

ウイルス性のかぜやのどの炎症から起こり、咽喉が腫れて呼吸がしづらくなります。発熱、声がかれたり、アシカの鳴き声や犬が吠えるような声で咳が出るのが特徴です。息を吸うときにゼイゼイと音がしたりします。特効薬はなく、呼吸を楽にする薬など症状を緩和する薬が処方されます。加湿や水分補給を行い、安静にしていれば、3～4日で回復します。呼吸窮迫が強い場合は、入院が必要なこともあるので、早めに医療機関で診察してもらいましょう。

7. 肺炎

発熱、咳、多呼吸などが主な症状で、肺にウイルスや細菌が感染することで発症する病気です。月齢の低い赤ちゃんの場合は、高熱やひどい咳の症状が現れないこともあるので、かぜをひいた時は注意深く様子を観察することが大切です。呼吸が早く、ぐったりして、食欲がない場合は早めに受診をしましょう。レントゲン写真で診断がつきます。



8. マイコプラズマ肺炎

発熱が1週間ほど続きます。激しい咳も出ます。また、肺炎のほか、気管支炎、胸膜炎、喉頭炎、中耳炎、髄膜炎、脳炎、肝障害、さまざまな病気を引き起こします。家族内感染があるので、注意が必要です。自然になおることもありますが、抗生物質を使って症状を早く改善させます。

9. 小児喘息

アレルゲンとなるハウスダスト、ダニ、花粉、動物の毛、タバコの煙、空気環境、気候などに対して、気管支が過敏に反応するために起こります。近親者の体質が遺伝していることも多いようです。気管支喘息は、繰り返し起こります。発作の程度は人によっていろいろです。小さい発作は、ヒューヒュー、ゼーゼーという喘鳴から、中度の発作は喘鳴がひどくなり、陥没呼吸もみられます。息苦しさで不機嫌、食事ができない、夜も苦しくて眠れないこともあります。大きな発作では、さらに喘鳴が強くなり、呼吸困難で眠れなくなります。チアノーゼが起きることもあります。治療も症状によってそれぞれで違いますが、基本は長期管理と予防です。発作をおさえるには、気管支を広げる気管支拡張剤を使います。アレルゲンがわかっている場合は、できるだけ遠ざけること、また抗アレルギー剤を使用します。成長するにつれて発作は、減る傾向にあります。

10. インフルエンザ

インフルエンザは、空気の乾燥する秋から冬にかけて流行します。かぜ症状のなかでも、全身症状が強くなるタイプで、とくに子どもはこじらせると重症化することがあります。インフルエンザ脳症などの合併症を引き起こすこともあるので、注意して対処してください。寒気とともに、急に39度以上の熱がでます。のどの痛み、咳、鼻水、だるさ、関節痛、頭痛などかぜ症状もあらわれます。腹痛、嘔吐、下痢などの胃腸症状があらわれることもあります。迅速診断することができるので、インフルエンザとわかり、早期に治療薬を飲み始めれば、症状を軽くすませることができます。流行前になるべく予防接種をしておくのもよいでしょう。

インフルエンザの感染力は非常に強く、十分に警戒が必要な疾患です。予防接種を受けることで感染を防いだり、発症した際も重症化を軽減する効果が認められています。流行シーズンに備え、かかりつけ医と相談してできるだけ早く、インフルエンザの予防接種を受けることをおすすめします。当院では10月から接種が始まっています。13歳までの子どもさんは、2回接種することをおすすめしており、できるだけ年内に終了できる間隔で受けましょう。



参考文献

「子ども医学館」小学館 他